



—木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ)—

イタリア科学・技術書展

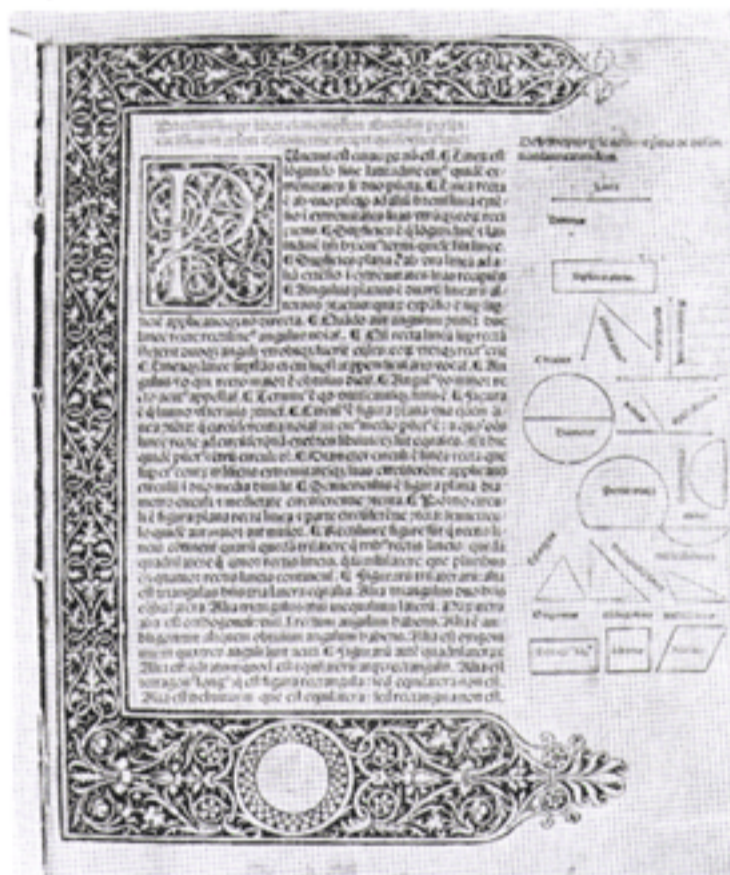
—イタリアルネッサンス期以降の稀覯本と印刷者—

松井好次

昭和52年12月6日から10日までの5日間、本館を会場に標記の展示会が本館、イタリア文化会館、ローマ国立中央図書館、国立科学博物館、河北新報社の共催で開催される。展示される図書はローマ国立中央図書館が秘蔵する科学・技術書のうち、15世紀から19世紀の間に出版された挿絵が美しく科学的価値が高いもの124点である。全体として単に挿絵の変遷のみでなく、四世紀間のイタリアの科学思想の発達を理解できるよう配慮され重要な学者や学説のほとんどがここに展示されている。したがってこの展示会は科学に関心のある人にとって興味深いだけでなく、ドイツで生まれた活版印刷術の育ての親とも言えるイタリアにおける揺籃期以来の古書が展示されているという点で、書誌学或は印刷史に関心のある人にとっても興味深いものである。以下に今回展示される図書のうち著名な印刷者について、その印刷史上の特色を概説し、本展示会鑑賞の手引としたい。

展示図書の中にはインキュナビュラが6点——(a) Francesco Berlinghieri 著「**Geografia** (地理学)」, (b) Johannes de Sacrobosco 著「**Sphaera mundi** (天球論)」, (c) Euclides 著「**Elementa geometriae** (幾何学原論)」以上1482年印刷。(d) Caius Julius Higinus 著「**Poeticon astronomicon** (詩的天文学)」1485年印刷, (e) Bartolomeo dalli Sonetti 著「**Isolario** (島について)」1486年印刷, (f) Claudius Ptolemaeus 著「**Cosmographia** (コスモグラフィア)」1490年印刷——と16世紀に印刷された書物が31点含まれている。上記のインキュナビュラのうち半分の3点(b, c, d)は Erhard Ratdolt によってヴェネツィアで印刷されたものである。この人は名前からも察せられるようにドイツ人で、最も美しいローマン体の一つをデザインした Nicolas Jenson, 初めてイタリック体を作らせ、またギリシャ文学を後世に残すのに大きな功績のあった Aldo Manuzio と共にヴェネツィア印刷界の三羽鳥と言われ、初期のイタリア印刷界に大いに尽くすところがあった人である。Ratdolt は1447年 アウグスブルクの生まれで、1476年から1486年までの10年間ヴェネツィアで印刷活動を行ない、その後招きに応じて郷里に帰り、1522年まで印刷を行ない、1527年か1528年の初め81才で死んでいる。彼は主に天文学及び典礼に関する図書を印刷し、ヴェネツィアの10年間には67点

(G. R. Redgrave による)を印刷している。彼の印刷史における功績は次の点である。(1)装飾のあるタイトル・ページを初めて作り、それに印刷者の名前を記載した。(2)それまで朱字書き人(rubricator)の手にまかせられていた頭文字を初めて木版画を用いて(G. R. Redgrave による)印刷した。(3)初めて一頁内に多くの色彩を用いて印刷した。(1)が初めて行なわれた図書は、1476年の「Calenda-



ユークリッド著「幾何学原論」

rium (曆書)」の複製においてであり、それが散文ではなく韻文で書かれていた点を除けば現在のタイトル・ページと全く同じである。(2)については1457年に Johann Fust と Peter Schöffer が彩飾頭文字を金属板に彫って印刷しようとしたが失敗したものである。Rotdolt の作品でこの点において特に傑出しているものは1478年に印刷した「Arte di ben morire」であり、椀の葉と実で飾られている。(3)を初めて行なったのは、今回の展示会に出品されている(b)「**Sphaera mundi** (天球論)」においてである。彼はまた執政官 (doge) Mocenigo に献上した Euclides の「**Elementa geometriae** (幾何学原論)」において献辞を金色のインクで印刷している。これはまたローマン体の活字を使って印刷された最も美しい図書の一つであり、Euclides の「**Elementa geometriae**」を木版画で図解しようとした最初の試みの書でもある。そこに印刷された図形は、Rotdolt の印刷技術がいかに正確で素晴らしいものであるかを示している。なお、この献辞が金色で印刷されていないものが今回の展示会に出品される予定であり、また本学理学部数学科図書室でも同書を所蔵している (掲載写真)。

インキュナビュラの (a)「**Geografia**」を印刷したのは、当時のフィレンツェで著名な印刷者であった Niccolò di Lorenzo である。彼は Niccolò Tedesco, 或は Niccolò di Lorenzo della Magna ともいわれ、1477年に印刷活動を始めている。代表的な作品は Antonio Bettini 著「**Monte Santo di Dio**」と Dante 著「**Commedia di Dante** (神曲)」である。前者は1477年に印刷され、銅版画の入った最初の図書であり、そのデザインは Sandro Botticelli のものを基にしている。後者は Dante の「神曲」の最初の印刷本で、1481年に印刷された。これにも前者と同じく Botticelli のを基にした挿絵が入っている。

今回の展示会の医学部門では最も古い図書である Johannes de Ketham 著「**Fasciculo di medicina volgare ... volgarizzato da Sebastiano Manilio** (セバスティアノ・マニリオにより俗語に翻訳された医学文献)」は Gregorio de' Gregori が1508年にヴェネツィアで印刷したものである。これは Mantegna 流の非常に美しい木版画の挿絵がついていることで有名な本である。彼は1480年から1505年までの間、兄の Giovanni と協同で印刷活動を行ない、すでに1491年にこの最初の版を二人で出しているが、今回展示されている reprint の方が、デザイン、出来ばえの両方の点でずっと勝っている。彼らは他に Boccaccio 著「**Decamerone** (デカメロン)」(1492) や Masuccio 著「**Novellino**」(1492) などの俗語の図書を印刷したことで知られている。インキュナビュラの (f)「**Cosmographia**」は Pietro della Torre の代表作で、彼はこれを1490年の11月4日にローマで印刷している。また Paganino de' Paganini が1509年に印刷した Luca Pacioli 著(g)「**Divina Proportione** (崇高な比例)」には、初期イタリック体の珍しい活字を見ることができる。これ(g)は16世紀に印刷された最も貴重な図書の一つであり、この挿絵の幾つかは Léonardo da Vinci によってデザインされたと言われている。Paganino de' Paganini は1483年から1486年までは Giorgio Arrivabene と協同で、1487年から1507年までは一人で、1508年以降は息子の Alessandro と共に、初めはヴェネツィアで、後にトスカーナで印刷活動を行ない、1518年にはアラビア語のコーランを印刷している。

Claudius Galenus 著「**De ossibus ... Ferdinando Balario siculo interprete** (骨について)」は1535年にローマで Antonio Blado Asolano (1490—1567) によって印刷されたものである。Blado が印刷活動を始めたのは1516年で、その作品は「**Milabilia urbis Romae**」であった。彼の印刷所は Campo di Fiori にあり、ここは Sweynheym と Pannartz によって1465年にイタリアで最初の印刷が行なわれた地 Subiaco の近くである。Blado の作品のほとんどはすでに出版されたものの reprint ではなく、著者自筆の原稿からのもので、特に Machiavelli の作品を出版したことで有名である。また彼は自分で印刷した「**Il Principe**」を教皇 Clement 七世に献上したことによって1549年に法王庁付印刷師の称号を貰い、Index を索引の意味で使った初めての図書(木寺編「洋書事典」による)である Index librorum prohibitorum (ローマ・カトリックにおける禁書目録)を1558年に印刷している。彼の印刷所は美しい活字を持っていたことでも有名であり、その中のイタリック体の活字は特に有名である。

Leon Battista Alberti 著「**L'architettura tradotta in lingua fiorentina da Cosimo Bartori** (建築論, コシモ・バルトリーによるフィレンツェ語訳)」を1550年に印刷したのは Lorenzo Torrentino である。彼の本名は Laurens Leenaertsz van der Beke といい、生まれはオランダのヘルモントである。1546年、商業主義に堕した当時のフィレンツェの印刷界を元の状態に戻す為に Cosimo I de' Medici (メディチ家のコシモ一世) によって招かれ、フィレンツェ公爵付の印刷師として1563年まで活動した。彼は、期待通りの印刷者で、彼の作品の優秀さには、Giunta 家ですら足もとにもおよばなかった。Torrentino はまた、「**Digestorum seu Pandectarum libri quinquaginta ex Florentinis Pandectis repraesentati** (一般にユスティニアヌス法典と呼ばれている)」50巻を印刷したこと

でも有名であり、この法典が中世だけでなく現代の法律の基礎となっていることは衆知の事実である。なお、上記の Giunta 家とは15世紀、16世紀及び17世紀にイタリア、フランス及びスペインに於いて活動した栄誉ある印刷者の一大家族で、かの有名な Aldo Manuzio が経営する Aldine Press とはライバル関係にあった。始祖はLuca-Antonio Giunta で彼と兄弟の Filippo Giunta はイタリアの伝記作者によって Coryphaner (印刷者達の指導者) と呼ばれている。この展示会に出品されている Juan de Valverde 著「Anatome corporis humani (人体解剖学)」は1607年に彼らによって印刷されたものである。また Pietro Cataneo 著「I quattro primi libri di architettura (建築についての最初の四巻)」は1554年に Aldo Manuzio の後継者によって印刷されたものである。

Giovanni Antonio Rusconi 著「Dell'architettura (建築について)」は1590年に Giolito Press によって印刷されたものである。この出版社は16世紀のイタリアの文学書出版において重要な役割を果たした出版社で、その当時の有名な作家の作品をほとんど印刷している。始祖は Giovanni Giolito で、初めトリノとトゥーリンで印刷活動を行ない、1536年にヴェネツィアに会社を創設した。その後を継いだ息子の Gabriel は印刷及び書籍販売者のギルドにおいて評議員として重要な役目を果たし、イタリアでは Aldo Manuzio 以来の偉大な印刷者とみなされている。彼は、Dante の「神曲」に初めて「Divina」を冠した人であり(以前は単に Commedia di Dante と呼ばれていた)、また異なる作家の諸作品を同じ判型で出版した最初の人でもある。

以上のように今回展示される図書は科学史のうえで価値があるのみでなく、ルネッサンス期のイタリア印刷史のうえでも、著名な印刷者の最高の作品が多数含まれている。近代西洋文化の発祥地イタリアの国宝級の貴重図書を、私共に見る機会を与えてくれたイタリア文化会館、ローマ国立中央図書館の好意に深い感謝をささげるものである。

註、書名がゴチック体のものは今回展示される図書である。

(閲覧課閲覧掛)

第51次国立七大学附属図書館協議会並びに部課長会議報告

標記の会議は京都大学が当番館となり、昭和52年9月21日・22日の両日、公立学校共済組合大津宿泊所さざなみ荘において、文部省から情報図書館課田中専門員、栗原事務官の出席を得て開催された。

9月21日の部課長会議では、次の協議題について情報並びに意見の交換、討議が行なわれた。

1. 「学術雑誌総合目録人文科学欧文編」刊行に対する協力体制の確立について。
2. 在外研修の制度化について。
3. 当面の人事問題について。
4. 附属図書館部課長の管理職手当について。
5. 購入図書(和書、洋書)の値引きについて。
6. 翻刻、掲載、放映、出陳等の取扱いについて。

9月22日の協議会では、討議に先立ち前日の部課長会議の議長から報告が行なわれ「学術雑誌総合目録人文科学欧文編刊行予算の確保について」が協議題に追加された。

予め準備された協議題である

1. 共同利用図書購入費の予算措置要望と取り組み方について。
2. 相互協力担当要員の増員について
3. 図書館部課長の待遇改善をはかることについて。

4. 特別図書購入費及び外国雑誌購入費の合理的効率的配分について。
5. 附属図書館に教官(専任)定員及び「専門員」(仮称)を置くことの可否について。
6. 学術情報流通と大学図書館について。
7. 中央図書館機能の近代化について。

について、熱心な討議が行なわれた結果、本年6月に行なわれた第24回国立大学図書館協議会の線に沿ってその実現方を要望するとともに、七大学図書館協議会としても53年度予算に向かって次の事項を重点的に関係省庁に要望することとした。

1. 「外国雑誌購入費」をさらに増額すること。
2. 「学生用図書購入費」をさらに増額すること。
3. 「共同利用図書購入費」を新設すること。
4. 「特別図書購入費」を継続しさらに増額すること。
5. 図書館分館長、部課長の「俸給の特別調整額」を支給並びに引上げること。
6. 「学術雑誌総合目録人文科学欧文編」刊行費を予算化すること。
7. 相互協力担当要員の確保をはかること。

なお、本学からは和田館長、長尾事務部長、竹原総務課長が出席した。明年度の当番館は大阪大学である。

(総務課長)

第9回国連寄託図書館会議

標記の会議が昭和52年10月6日・7日の2日間、東北大学附属図書館を当番館として本館会議室において開催された。

(経緯)

本館は昭和40年7月に国連寄託図書館の指定を受け無償で国連資料の送付を受けていたが、近年に至り諸般の事情から国連出版局(U. N. Publication Board)は昭和49年8月29日付の文書により寄託資料の継続を希望する図書館は、国連資料一式の場合800米ドル、部分寄託については500米ドルの支払を条件とする新しい有償寄託制度を要請して来た。東北大学附属図書館ではこの支払を条件とする新しい制度について慎重に検討した結果、国連資料の重要性を認め、昭和50年度より一括購入(800米ドル)をもって今後共継続受入れとすることを決定した。

受入れられる国連資料の種類は、総会、安全保障理事会、経済社会理事会、信託統治理事会、事務局、国際司法裁判所の6機関で作成する資料を全て含んでおり、研究閲覧室に配架され参考調査掛が整理を終了し、この会議を機会に担当職員により利用が行われることとなった。

(会議の概略)

第1日午前は、和田館長の開会の辞及び国連広報センターの福田菊氏から挨拶のあと大視聴覚室を会場として、法学部太田知行教授による公開記念講演「欧米における法令、判例の情報検索とコンピューター」が行なわれ約50名の参加者があった。

記念講演の大要は次の通りであった。

(1)合衆国における出発点、J. Horty の Univ. of Pittsburgh における Project (2) 1972年頃の状況、Aspen System Corp. Mead Data Central (3) full-text 方式の問題点(4)西ドイツ社会法裁判所の試行、(5) EC の information retrieval system (6)むすび、日本での導入の問題点

昼食後、会議参加者をマイクロバスにより、片平構内、青葉城、青葉山構内を案内した。

午後の初めは、福田氏の司会で参加各館が提出し今回の会議資料に掲載されたレファレンス事例報告について提出者から説明があった。この内容は国連にとどまらず広く国際的事項に関するレファレンス事例を含み、本館にとっても国際的事項のレファレンスは二次資料などが不十分なサービス体制であることから、今後この事例集を参考とすることができる。また参加者からもその重要性が指摘され今後継続的にこの会議のテーマとして行くことが決定した。「新刊図書を紹介」は東

京大学国連寄託図書館浜村小夜子氏が次の①②を、西南学院大学国連寄託図書館今永義純氏が③④⑤を説明した。

- ① Supplement to the Statistical Yearbook for Asia and the Pacific 1974. ESCAP, 1976, 75p. E/CN 11/1192/Add. 1, E. 76. II. F. 19
- ② A Select Bibliography on Territorial Asylum, Reference lists no. 9. ST/GENEVA/LIB. SER. B/Ref. 9, 1976.
- ③ 第三世界国際関係資料集 浦野起央著 有信堂 1976年
- ④ 南北問題国際関係資料集 外務省情報文化局編 外交時報社 1977年
- ⑤ Hoover Institution. Bibliographical series: International organization; An interdisciplinary bibliography, compiled by Michael Haas. 1970.

「国連資料の整理法について」は本館の高木参考調査掛員が本館で採用している方式について説明した。この後議事日程を変更し、第2日の最後に予定されていた「来年度の開催について」を取り上げ、次回は北海道大学国連寄託図書館において開催されることが決定された。

第2日の午前は国立国会図書館石川光二氏が「国際統計について」と題して、Directory of International Statistics. Statistical papers series M. No. 56, 1975をテキストに用い具体的に分野別の統計を、作成機関、発表形式、データベースなど明示するなど、実際的な統計レファレンスの指導を行なった。この会場には本館職員も参加した。

午後は、外務省国連資料室の増田徳蔵氏から「国連の機構と文書記号について」詳細な説明があった。最後の議事「国連について」は、京都国連寄託図書館の入矢正子氏が「国連資料を受受する国連寄託図書館に対する指示書」(和訳)及び「国連寄託図書館管理規則」(同)を配布して新しい国連寄託図書館制度について大要を説明した。また福田菊氏から国連への要望事項、国際子供の年(1979)などの説明があった。

最後に本館竹原総務課長から閉会の辞、京都国連寄託図書館林館長から謝辞があり、予定通り会議日程は終了した。

(会議参加者名)

外務省国際連合局国連資料室増田徳蔵、国連広報センター福田菊、国立国会図書館石川光二、東京大附属図書館浜村小夜子、愛知県勤労会館小谷完司、京都国連寄託図書館林正、入矢正子、広島大附属図書館鎌倉悟、九州国連寄託図書館甲斐文門、西南学院大図書館今永義純、東北大附属図書館和田正信、外関係者。(閲覧課長)

「本館と分館の関係について」評議会で承認

附属図書館商議会は、昭和50年5月に東北大学評議会から、東北大学における附属図書館の組織・機構と管理・運営のあり方について諮問をうけて以来、審議を重ねた結果、全学図書館行政の基本的な考え方を、下記の「本館と分館の関係について」に集約し、評議会で答申したが、去る昭和52年7月26日開催の評議会において商議会原案どおり承認された。以下にその全文を掲載する。

本館と分館の関係について

文部省の大学図書館改善協議会は現在改善要綱を作成中であるが、その中で大学図書館の使命は次のように表現されている。

「大学図書館は、大学における学術情報利用のための中心的機関として、教育及び研究に必要な学術図書・雑誌その他の記録資料を効率的に収集・整理・蓄積して、学部学生、大学院学生及び教官等による学修・研究・調査のための利用に対し、これを効果的に提供するとともに、その他学術情報の利用の円滑化のために必要な活動を行い、大学教育・研究に貢献することを基本的使命とする」

本学における図書館においても、この使命観はそのまま容認されるものと考え、それに東北大学の組織及び運営を定めている規程に準拠して、具体的な運用を考えていくことにする。

1. 東北大学における図書館システム

東北大学における図書館システムは本館を中心に分館を衛星的に配置し、さらに必要に応じて部局図書室を設けたものとする。

このような分散配置では、ややもするとそれぞれが局在化されやすい欠点がある。学際的な学術研究が重要となってきた現在では、これらが互に補完し合う機能をもっていなければならない。

2. 本館の責任

本館は歴史的及び地理的な関係から、川内地区所在の部局の学生及び教官等の学修・研究に直接対応していくのは当然であるが、それと同時に、東北大学の図書館システムを機能させていく責任がある。

このため、本館は学修図書、学術情報・資料の実態を適確に把握し、相互の連絡調整に当る。

特に、学術情報・資料の急激な増加、価格の高騰、財政状況の悪化は、効率的な情報・資料

の収集を必要とし、連絡調整の機能の強化が不可欠となっている。

3. 分館

分館は単なる地理的な問題あるいは部局における便益の問題として扱うのではなく、専門別分館としての機能するものとする。既設の分館もこの考えに徹して今後の展開を図る、これが機能すれば図書館は分館を含めて全学共同利用組織として十分な役割を果たすことになる。

新しい分館の設置については、関係部局長と図書館長の間で十分協議し、合意の結果を図書館長が商議会の議を経て評議会で提出し、承認を求めるものとする。

東北大学附属図書館規程の第3条に「附属図書館に、次の分館を置く、(以下略)」とあり、分館は附属図書館の構成のなかに含まれている。したがって、図書館長は分館の設置に責任があり、前述のような手順をとるべきである。

4. 部局図書室

部局図書室は主題別図書室として運営していく、それにしてもあまり零細なものは設置しないようにする。これは相互利用の面の対応が難しく、この機能の不足するものは図書館システムの構成要素とは考えられないからである。

部局図書室は当該部局にその設置が委任されているが、その設置及び運営については本館または関係分館と十分連絡をとる必要がある。また、全学的(あるいは大学間)相互利用の立場からの双務協定に対応できるよう配慮しなければならない。

5. 予算

本学の共通経費による図書館の予算、概算要求の予算については、図書館長が分館長と協議し、それらの原案を作成し、商議会の議を経て、決定する。共通経費委員会、評議会での説明は図書館長が行う。

東北地区初の JOIS 公開 デモンストレーションについて

利用者が必要とする学術文献を如何に的確かつ迅速に提供できるかは近代図書館の課題である。今まで研究者は、二次資料を用いて文献検索をする時、多くの時間と労力を割いていたが、近時これらの多様な検索要求にリアルタイムで答える on-line system の一つが日本科学技術情報センター (JICST) で実用化された。JOIS (JICST On-line Information System 会話型オンライン情報検索システム) と呼ばれるもので、昨年7月より JICST 東京支所にディスプレイ型端末を設置して一般公開された。コンピューターを利用したのオンライン化が急速に進展しつつある今日、必要とする文献の二次情報をその場で検索入手することが可能になったという点で画期的であり、今後の文献検索に質的变化をもたらされることになろう。現在データファイルは① JICST 理工学文献② CAC 化学文献③ MEDLARS 医学文献④ クリアリング情報ファイルの4種で3、4年の遡及検索も可能であり、年々データが追加されることになっている。医学分館においては館長、医学部長の線で本年3月から設置方を JICST に要望していたが、此の度公開実演について JICST のご好意により支所を置かないところとしては全国初の公開実演が来る11月10日(木)医学部臨床研究棟3階で実施される運びとなった。この機会に直接端末に触れ、マニュアル方式と機械検索方式を比べ、適合率を試してみるなど、このシステムについての理解を深めて下さるよう理工学・生物科学関係の研究者の御来観をおすすめしたい。

なお、このことについてのお問い合わせは附属図書館医学分館にお願い致します。(医学分館)

昭和52年度大学図書館職員 長期研修に参加して

整理課 和漢書目録掛長 阿部 寿雄

大学図書館職員長期研修は、文部省学術国際局、図書館短期大学の共催で図書館短期大学を主な会場として、昭和52年8月8日から9月3日まで開催された。4週間におよぶこの研修は大学図書館職員にとっては当面の問題である図書館業務の合理化、機械化による大学図書館の近代化を促進するための将来の指針として大いに有意義であったといえる。

研修には、北は北海道から南は沖縄まで国立、公立、私立の大学図書館職員と、国立高専の図書館からも参加され女性11名を含む総勢38名であつ

た。毎年行なわれているこの研修会の目的は、大学における教育、研究活動の急速な進展にとともに、大学図書館が利用者の高度な要求に即応した図書館資料および情報提供体制の整備の一環として、図書館業務の合理化、機械化によるサービスの向上と質的改善を図ることにより大学図書館の近代化を促進するということである。この趣旨のもとで今年のメインテーマとしてあげられたのは、書誌情報の標準化、図書館業務の機械化、情報検索サービス(機械検索)である。また新しい試みとしての「職場の改善について(グループKJ法による)」は、国立中央青年の家に合宿し、日本能率協会の指導によって実施された。

大学図書館の近代化を促進するために重要なことは、図書館業務のシステム化である。図書館資料の収集、整理、利用の全般に互って整備し、学術情報の全国的な或は地域的なネットワークを編成することが必要条件であるが、コンピューターを導入する等の機械化のためにもこのシステム化がいかに重要であるかを痛感した次第である。

また、書誌情報の標準化についても、コンピューターの導入による書誌情報の処理と相俟って、学術情報が磁気テープベースで国際的に流通し交換されるために、国際的互換性をもった標準化が必要になって来ている。1977年2月末から国立国会図書館のJ・MARCには、今年受入れられた和書から入力開始され、昭和53年1月には機械検索が可能な状態になって来ている。「日本目録規則」1965年版についても書誌調整の意味から、また和書の特殊性を考える必要性からも再検討をせまられており、印刷カード、機械可読の目録が利用される様になった現在、ISBD(国際標準書誌記述—International Standard Bibliographic Description)を出来るだけ取り入れることを意図とし、日本だけの特殊な現象でなく世界的な目録規則の方向として取り上げるべきであると考え、「日本目録規則新版」が今秋予備版として出版される予定である。

以上業務的な報告に終始したようではありますが、最後に主たる講義要綱を紹介致します。

1. 序論：「学術情報と大学図書館」、「大学図書館の国際的動向」
2. 大学図書館の管理運営：「大学図書館行政」、「職場と人間関係」、「職場の改善—グループKJ法による—」
3. 情報管理とコンピューター：「図書館システム論」、「コンピューターの現状と可能性」、「データ通信の現状と可能性」、「情報検索システムの現状」、「図書館業務のコンピューター化」、「図書館とコンピューター—パネル討議—」

4. 書誌調整とMARC:「書誌情報の国際的標準化の動向と Japan MARC」,「UNI-MARC について」,「ISBD と日本目録規則」,「相互協力と総合目録」
5. 参考業務:「図書館における利用者研究」,「図書館における情報源」,「参考業務の実際」
6. 見学等:「東京工業大学」,「東京学芸大学」,「電々公社データ通信本部」,「JICST」,「国文学研究資料館」
- 共同研究討議:「業務の機械化について」,「相互協力について」,「管理運営について」
- 在外研究報告:「米国の図書館活動」
- 以上。

著作権講習会（東京会場） に出席して

閲覧課 閲覧掛長 及 川 三千男

昭和52年度図書館職員等著作権実務講習会が去る7月26日より3日間千代田区平河町の都道府県会館で開催された。文化庁主催によるこの講習会は毎年継続して行われているもので、本年も関係者255名の参加があった。講習内容は、主として著作権に関する基本的知識と図書館等の現場に必要な実務上のことに関するものである。昭和45年に全面改正された現行著作権法は、国際的レベルでの著作権保護の整備、充実を図るとされているが、このうち、われわれにとり一番の関心事である“複製”つまり図書館における複写業務をめぐる具体的な諸問題については、講習第2日目に図書館実務と著作権というテーマで図書館資料の複製に関する講義が行われた。いわゆる複写行為の業務委託のこととか、コイン式複写機の問題等図書館で従来よりいろいろ議論されていることについては、文化庁として否定的態度をとるという見解が担当講師より示されただけでそれ以上の説明は聞かれずに終わった。周知の様に、著作権法によって規定される図書館の複製行為は、基本的にあくまでも“公正使用”ということにあるが、英米各国に比較して法制上詳細な規定をもつわが国の場合、今日的な図書館活動の上から、その法律的メリットはどの辺にあるのだろうかをあらためて考えさせられた次第である。

東北大学記念資料室だより

本学の歴史に関する資料を収集している本室は、次第に多くの方々の理解を得て、ほとんど毎月のように何か珍しい記念物の寄贈を受けている。感謝にたえない所である。

10月10日、昭和21年9月の卒業生で、いま京都女子大学教授の寿岳章子さんから、下のような文書の写しが贈られて来た。30年昔を偲んで感慨なきをえない。職員の人々で同じく表彰を受けた方はないかと室員がたずねると、元文学部助教授・現本館非常勤職員矢島玄亮さんが持っておられた。早速写しを寄贈していただく。下のとおりである。

同様の趣旨の表彰状であり、同じく終戦後に発行されたものである。しかもその文章の何と相違していることか。矢島さん同様の文書、寿岳さん同様の文書を受けた方は、他にも数多くあったという。あるいは文章の違う第3の文書が出て来るかもしれない。50才以上の方はお手もとの書類箱をお調べになって下さい。

表彰状

矢島玄亮

右ハ去ル七月九日夜半ヨリ
十日早晩ニ巨ル敵ノ空襲
ニ際シ挺身敢闘シテ克ク
本學ノ防護ニカメタリ依
テ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和二十年九月一日

東帝國憲法總長 佐佐木武安 敬

表彰状

法文学部二年生

寿岳章子

右昭和二十年七月九日夜半
空襲ニ際シ進シテ本學諸施
設ノ防衛防火ニ挺身シテ功
績特ニ顯著ナルモアリ
仍テ茲ニシテ功ヲ表彰ス

昭和二十一年三月三十日

東帝國憲法總長 佐佐木武安 敬

図書館備付学生用図書 推薦の結果について

図書館では学生の学習、研究、教養上有益と思われる図書の推薦を、文、教、法、経、理各学部と教養部の教官に依頼した。

このたび、その集計をしたところ、74人の教官より379点(711冊)の図書の推薦があった。このうち既に本館で選定購入済のものを除いて166点(211冊)を購入することになったが、この学部別の内訳は次のとおりである。

なお、今後とも図書館備付学生用図書について、ご希望のものがありませんでしたら、ご推薦下さるようお願いいたします。

その他、詳細については、図書館閲覧課参考調査掛にお問合せ願います。

	回答者数 (人)	購入希望図書		購入予定図書	
		点数	冊数	点数	冊数
文学部	10	44	72	20	22
教育学部	3	22	39	8	10
法学部	7	41	88	26	28
経済学部	6	27	49	4	11
理学部	31	133	203	63	70
教養部	17	112	260	45	70
合計	74	379	711	166	211

(参考調査掛)

入館者調査の中間報告

去る9月16日(金)から22日(木)までの日曜日を除く6日間、入館者調査を行ないました。以下にその結果を報告します。

6日間の総入館者数は13,384人、うち教養部学生7,490人、学部学生5,894人で比率は5:4でした。これを一日当りに換算しますと入館者数は2,231人(四捨五入)、教養部1,248人、学部982人となります。これは昨年度の一日当り平均入館者数と比べて全体で41%、教養部で42%、学部学生で40%増加していることとなります。この原因としては、夏期休暇が終わり後期の授業が始まったこと、教養部の試験期間に調査期間が重なったことが考えられます。学部別の一日平均入館者数は次の通りです(括弧内は昨年平均)。教養課程の文学部115人〔72〕、教育学部36人〔30〕、法学部157人〔142〕、経済学部138人〔115〕、理学部197人〔123〕、工学部338人〔245〕、農学部94人〔53〕、医学部57人〔38〕、歯学部42人〔16〕、薬学部76人

〔43〕となり、学部課程は文学部161人〔126〕、教育学部69人〔41〕、法学部305人〔232〕、経済学部216人〔137〕、理学部91人〔47〕、工学部112人〔90〕、農学部10人〔7〕、医学部9人〔11〕、歯学部4人〔2〕、薬学部7人〔6〕、医療短大3人です。利用率の高かったのは、教養課程では薬学部で43%(一日当りの利用率)、次いで理学部34%でした。学部課程では法学部で52%、次いで文学部で45%でした。また各時間帯の利用率を見ると、一番多いのは12時から13時の間で全体の24%がこの時間帯に入館しています。次は9時から10時、10時から11時の15%がそれに続いています。

(閲覧掛)

指定図書リストの作成

昭和52年度指定図書リスト(B5版20p)が昨年に引続き作成された。これは文科系四学部ならびに教養部の教官が指定した725冊についてのもので、本館ではこれら指定書の運用に当っては集中的に一括して開架閲覧室に排架し、学生の利用に供している。なお、昭和53年度の指定図書購入希望は、目下とりまとめ中である。

(閲覧掛)

行事予定

○昭和52年度「東北大学附属図書館総合研修会」

期日 昭和52年11月25日(金)

会場 東北大学附属図書館

講師 東京大学附属図書館

整理課長 浅野次郎氏

演題 図書館業務の機械化と問題点

○イタリア科学、技術書展

期日 昭和52年12月5日(月)

イタリア大使による開場式

12月6日(火)～10日(土)

9:30—16:30 一般展示

会場 東北大学附属図書館

人事異動

(10月6日付)

(本館) 閲覧課 閲覧掛

辞職

事務補佐員 中村 久美子

東北大学附属図書館報「木遣子」 第2巻 第3号(通巻7号) 昭和52年10月31日発行

編集委員長 松井好次 編集委員 竹原悦郎、田代 寛、沼田恵美、菅野博之、細谷伸枝

発行人 長尾公司 発行所 東北大学附属図書館 仙台市川内 電話 代表 22-1800(5158)